

火災防災教育ビデオ

監修 東京理科大学 火災科学研究センター長 菅原 進一
東京大学 名誉教授

毎日が火の用心

高齢者施設の防火管理



群馬県渋川市・静養ホームたまゆら
(平成21年3月15日)



フラッシュオーバー実験

資料提供：県央地域広域市町村圏
組合消防本部



長崎県大村市・やすらぎの里さくら館火災
(平成18年1月8日)



避難者の確認

消防法改正・2009年4月1日から施行

面積による制限がなくなり
全ての設備に設置

延べ面積が
275㎡以上の
施設に設置

自動火災報知設備 火災通報装置 消火器 スプリンクラー設備

企画意図

2009年3月に発生した群馬県渋川市の老人ホーム火災では、利用者16名の内10名の方が亡くなりました。また2006年1月に発生した長崎県大村市の認知症グループホーム火災でも7名の高齢者が逃げ遅れで亡くなりました。この火災事故を教訓に、消防法令の改正が行われ、消防用設備などの強化がされ、ハード、ソフト両面での充実強化が図られてきました。しかし、これらの火災で多数の死者が出た直接の原因は、種々ありますが、常に指摘されてきたのは、火災発生時の施設従業員の対応行動です。そこで、この作品では、高齢者福祉施設での正しい防火管理のあり方を、過去の火災に学びながら具体的に描きます。

作品の概要

●過去の高齢者施設火災

平成21年3月19日の深夜、群馬県渋川市の高齢者施設「静養ホーム・たまゆら」で火災が発生。16名の入居者の内、10名が亡くなる大惨事となった。火災発生後、浮かび上がってきたのは、経営者の防火意識の低さと防火体制の不備だった。今までにも、高齢者施設火災は度々起こっており、なかでも注目されたのが、平成18年1月8日、深夜に発生した、長崎県大村市の「やすらぎの里・さくら館」火災だ。これら的高齢者施設火災の現場映像、事故の状況、消防関係者へのインタビューなどを重ね、様々な角度から大惨事の原因を検証していく。

●恐怖の瞬間—フラッシュオーバー現象

なぜ、高齢者施設火災では、多くの犠牲者が出るのか…カメラは火災発生から、ある一定時間を過ぎると一気に炎の勢いを増す、「フラッシュオーバー」と呼ばれる現象の実験映像を捉える。一気に天井まで燃え昇る炎。火災が発生した場合、「フラッシュオーバー」が起こる前に避難することが、極めて重要と言える。しかし、多くの高齢者は「フラッシュオーバー」が起こる前に、逃げ遅れて命を落としている。

●炎より怖いのは煙・一酸化炭素の恐怖

カメラは火災時の煙の動きを捉えた実験を捉える。煙が充満し、層となって下がってきて部屋の視界が真っ暗になる。これでは逃げる方向が全く分からない。

更に怖いのは煙の中に含まれている一酸化炭素。一酸化炭素とは、吸うと、身体に酸素を運ぶ機能が低下し、身体が痙攣して、麻痺、動けなくなって、やがて死に至る、恐ろしい有毒ガスである。火災発生時、炎より先に煙に巻かれ、逃げる方向を失い、一酸化炭素で身体の動きを奪われて死に至るケースが非常に多いのだ。

●高齢者施設に必要な防火設備とは

国では「やすらぎの里・さくら館」火災の教訓を基に、消防法を改正し、平成21年4月1日から施行されている。ここでは新しく変更された消防法を詳しく解説する。消火、警報設備は面積による制限がなくなり、スプ

リンクラー設備は275㎡以上の施設に設置が義務づけられた。スプリンクラー効果の実験映像も捉える。

●火災発生から避難誘導までの流れ

火災発生時、職員の行動が被害を抑える事にもつながる。ここでは、いざ火災が発生したら、どのような手順で対処していけばよいか、火災発生から避難誘導までの流れを詳しく説明する。

●ある認知症グループホームの防火安全対策

認知症のグループホーム「フクチャンち」。カメラは、この施設の避難訓練日に密着し、実際の高齢者福祉施設での防火管理のあり方を捉える。防火管理者にマイクを向け、実際の現場での防火対策の苦勞、工夫をドキュメントする。

監修 東京理科大学
火災科学研究センター長
東京大学 名誉教授

菅原進一

協力 長崎県
県央地域広域市町村圏組合消防本部
日本医科大学 法医学教室
小規模多機能型居宅介護事業所
ライフ吉井田
グループホーム フクチャンち

映像提供 長野県消防学校
千住スプリンクラー株式会社

制作・脚本・監督 高木 裕己

撮影 松尾研一／高橋哲也

ナレーター 赤間麻理子

制作著作 株式会社 映学社

¥68,250 (税込)

VHS・DVD [カラー25分]

●お問い合わせ、お買い上げは……